をしへをく形見をふかく忍ばなむ身は青海の波に玄がれぬ

〔奥の細道〕彌生も末の七日、〇元禄二年　明ぼの、そら朧々として、月は在明にて光をさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し、むつましきかぎりは、宵よりつどひて、舟に乘りて送る、千住と云ふ所にて、船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそゝぐ、

行春や鳥鳴魚の目は涙、これを矢立の初として、行く道なほすゝまず、人々は途中に立ちならびて、後かげのみゆるまでは見送るなるべし、

〔書言字考節用集九言辭〕坂迎（サカムカヒ酒迎、馬迎、〇迎、〇並同、）

〔倭訓栞中編九佐〕さかむかへ　坂迎の義、京師の人參宮せしを歸路に迎ふるをいふ、其もと東へ下る人の歸りを、逢坂まで出迎ふるよりの名成べし、關迎ともいふ、人を迎送するに、四方の關に至るは、異朝の例也、詩にも西出陽關無故人といへり、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國務條々事

一境迎事

官人雜仕等任例來向、或國隨身印鎰參向、或國引卒官人雜仕等參會、其儀式隨土風而已、

〔今昔物語二十八〕寸白任信濃守解失語第卅九

今昔、腹中ニ寸白持タリケル女有ケリ、□ノ口ト云ケル人ノ妻ニ成テ懷妊シテ、男子ヲ產テケリ、其ノ子ヲバ□トゾ云ケル、漸ク長ニ成テ冠ナドシテ後官得テ、遂ニ信濃ノ守ニ成ニケリ、始メテ其ノ國ニ下ケルニ、坂向ヘノ饗ヲ爲タリケレバ、守其ノ饗ニ著テ居タリケルニ、〇略下

〔兎園小說十二〕賀茂村の坂迎ひ　京い角鹿比豆流

伊勢大神宮廣前に、太々神樂捧げ奉るとて、かの御社に春毎參詣する事、六十六國に殘る處もな